

木曾川文庫

木曾川

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《上石津町》

緑香る源流の町、上石津町

AREA REPORT

上石津町の用水事業と未来プロジェクト

気ままにJOURNEY

上石津HUMAN WATCHING

自然を愛し、夢を語り合う人々

歴史ドキュメント

木曾三川下流域における渡船と物流

TALK&TALK

木曾三川の水運を振り返って

民話の小箱

弥太郎用水

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えて
いきたいと思っています。
今回は、揖斐川の支流牧田川の
源流に広がる上石津町から、
用水事業などを中心に、
河川交通シリーズでは、
渡船と物流について特集します。





上石津町空撮

緑香る源流の町、上石津町

上石津町は、揖斐川水系の牧田川流域に開けた盆地

六世紀の中ごろから人々は集落を形成し、
武家社会の台頭により、関ヶ原合戦など、
幾多の戦場となりました。

それも、伊勢街道・牧田街道・江州街道など、多くの街道が交差する交通の要衝であったため、
江戸時代には旗本高木家が入部し、明治維新まで、土地に密着した政治が行われていました。
そして現在、上石津町は、「日本昭和音楽村」を宣言。
音楽文化の振興を中心に、町民・行政が一体とならたまちづくりを推進しています。



上石津町二又古墳出土須恵器装飾壺

地区や多良地区のあちらこちらで縄文土器や石器が見つけられ、遺跡の分布から推察すると、人々は牧田川沿いの河岸段丘に生活の場を求めていたようです。しかし、農業が始まった弥生時代の遺跡はほとんど発見されておらず、したがって、上石津の地形から推測すると、焼畑農業がかなり長い間に亘り続いたものと思われる。

豪族が台頭する古墳時代の遺跡としては、牧田古墳群を挙げることができます。これらの築造は六世紀初頭。全体に円墳が多い中、わが国独自の前方後円墳も規模は小さいながら象尾山の山頂に一基存在し、有力豪族の墳墓とみられています。これらの古墳から、千二百年前と思われる稲もみが発掘され、この時期、農業が著しく発達したと思われる。

神宮領から地頭領へ

大和朝廷による全国統一が始まるころ、この地方は美濃国多芸郡に所属、その後石津郡と

なりました。この頃、天武天皇が多良（今幸）したと伝えられ、それにちなんで車御路森の地名が生まれたようです。

「神鳳抄」に美濃国内の伊勢神宮領の一つとして、土岐多良御厨の名が記されています。これは現在のの上石津町に存在した伊勢神宮神宮領で、院宣によって多額な代米を納める有力な納所でした。これらの神宮領は平安末期に成立。鎌倉時代になると、新しい武家社会の経済的基盤となる地頭領として治められていくこととなり、地頭が荘園を領有し私有化を果たすことにより、鎌倉政権の統一が着々と進められていきました。

熊坂長範の伝説

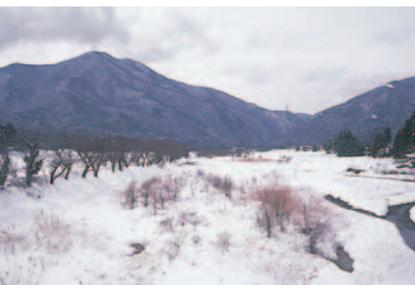
熊坂長範は今から七百年余り昔、美濃と尾張を舞台に荒らし回った盗賊の首領だと伝えられています。長範が根城としていたのが、上石津の烏帽子岳。三重、滋賀、岐阜、三重の分水嶺をなす標高八六五mの烏帽子岳の山頂付近に、長範屋敷を構えていたようです。ここからは、不破関や鎌倉街道、江州街道、勢州街道、伊勢湾までも眼下に見下ろすことができ、時刻を定めて山を降りては旅人を襲い、金や品物を奪っていたようです。こんなことから

の地を時村（現在の時）と呼び、烏帽子岳を熊坂山と称するようになった。

さてこの長範は、良民をいじめる権力者からは財宝を奪いとり、それを惜し気もなく貧しい百姓に分け与えたことから、義賊として土地の人々に親しまれていたようです。

山越の道

熊坂長範が拠点とした、時村には「止岐」「土岐」「止記」などの同韻語の地名もあり、いずれも美濃国から伊勢・近江国との「はし止まり」とか、「地岐わかれ」を意味していました。この折衝地帯には、関ヶ原と養老を結ぶ美濃中道、今須から平井を経て牧田・養老に至る今須越、五僧・保月越から時・多良へ、時・多良から伊勢へ通じる道が開けて



百間付近から望む雄大な烏帽子岳

山々に抱かれた山紫水明の地

岐阜県の南西端に位置する上石津町は、西の鈴鹿山脈、東の養老山地に囲まれた帯状の盆地です。町の中央には、三國岳を源流とする牧田川が北流し、上流部は多良峡と呼ばれる景勝地です。集落や耕地は河川沿いに分布し、良質米が生産されています。山林は町の九割を占め、従来は農・林業に依存してきましたが、名神高速道路や国道三六五号の改良により、今後、産業や観光の発展が期待されています。

牧田川流域に開けた古代

昭和五二年、細野地区で発見されたナイフ状の石器は、先土器時代の遺物です。以後、時

おり、政治や交易のほか文化の交流が行われていたようです。

この要所では軍勢の往来もあり、永禄年間（一五五八〜七〇）には、織田信長の命を受けた羽柴秀吉が伊勢長島攻めに際して、この地を通っているようです。その時、秀吉が戦いの疲れをいやすため入浴した場所を湯谷、陣を張った所を城山と呼び、その地名は今でも残されています。また、天正十一年（一五八三）、豊田秀吉が北勢の滝川一益を攻めるため、弟の秀長に一隊を率いさせて時・多良を越え桑名に兵を進めています。

島津の敵中突破

上石津の北方にある鳥頭坂も激しい合戦の場となった所です。ここは、不破関の裏門にあたり、関ヶ原へは伊勢街道が結んでいます。時は慶長五年（一六〇〇）、天下を分けた関ヶ原の合戦で、島津義弘は意を決して西軍に加わり、その主力として徳川家康率いる東軍を大いに悩ませていました。

しかし、小早川秀秋が東軍に内応したため形成は逆転し西軍はたちまち総くずれ、島津勢も敗兵二百余騎となりました。そこで逆に家康の本陣前を切り抜け牧田街道より伊勢街道に活路を求めました。この時、主君を本國へ逃すため、殿で戦ったのが義弘の甥、豊久群がる追撃軍をわずかに三騎で迎え討ち、鳥頭坂でくいとめまされた。しかし、彼はこの激戦で重傷を負い、逃げのびた上多良の地で自害し果てました。この峠には、豊久の勇戦を称える碑が建てられています。

水行奉行、旗本高木家の功績

関ヶ原の合戦で功績を挙げた高木家は、慶長六年（一六〇一）、旗本として時・多良に入



鳥津豊久の墓

部しました。高木家は

東・西・北の三家に分かれ、西家は、二千三百石、東・北家はそれそれ千石で時・多良を治めました。旗本はほとんどが江戸に住み、知行地には代官・用人を置いて支配を任せていましたが、高木家は知行地の多良に在り、交替寄合の格式を許され、参勤交代も行っていました。

美濃国における旗本の任務には、木曾・長良・揖斐三川の治水、利水の国役がありましたが、高木家は駿府城や一条城の普請奉行も務め、宝永二年（一七〇五）には、美濃国内の諸河川維持のための水行奉行を任命され、代々三家が年番で常に諸川用水排水路に至るまで水通りに支障のないように見廻り、その責任を担って広大な美濃尾張の水域を寛永年間（一六二四〜）より一四〇年の長きに亘り監督を勤めました。宝暦三年（一七五二）に着手した薩摩藩による宝暦治水の折にも、幕府の役人として大きな功績を残しています。

牧田宿と九里半街道

美濃と伊勢の要衝であった上石津は、江戸時代に入るとますます重要な役割を帯びました。町には伊勢街道・牧田街道・江州街道保月越・九里半街道・平井道が通り、これらの街道は中山道・東海道の脇街道として繁栄しました。

この牧田街道の要所に立地する牧田宿は、



高木家入郷地の石標

中山道関ヶ原宿から分かれて東海道に至る伊勢街道の要地のみではなく、牧田川沿いに鳥江・栗笠・舟附の三湊に通じる牧田街道の分岐点にもなっていました。北濃や名古屋桑名から京都への上り荷物は舟運によりこの三湊に到着し、ここで荷物を牛馬に積替え、牧田街道を琵琶湖畔の朝妻湊・米原の近くへ送られました。この陸上輸送を九里半廻しと呼び、朝妻湊から京都へ運ばれました。しかし、急流で舟運に恵まれない山奥では、人が背負って峠を越え、そこから川舟に積んだこともありました。多良の炭もかつて峠を越えた後三湊へ送っています。なお、当時の人々は農業の合間に三湊まで荷を運搬して駄賃を稼ぎ、生活の助けとしていました。

弘化の百姓一揆

西高木家二千三百石の領内人口は約千八百人。これらの領民を支配するために、四〇名に及ぶ家臣を抱えていたほか、村役人として約百名を支配していました。これらの行財政における負担はことのほか重く、西高木家の財政は逼迫していました。この財政難を乗りこえるため西高木家は、紀州藩の貸付金役所から八百両という大金を領内村々の名義で借用しました。この借用が多良村騒動と呼ばれる元凶。借財の返済を転嫁され、返済期日が迫って困り果てていた領民は、返済のめどが立たないまま、時・多良一郷の代表として、小寺武兵衛と三輪孫六の二名の庄屋を紀州へ送り出し、期限延期を嘆願したが認められませんでした。そこで領民は、七月六日突如として御林山（領主所有の山）に集まり、断りもなく杉の伐採を始めました。事態の容易ならぬことに気づいた西高木家では、御用人を遣わして領民を説得、これにより実力行使を中止しますが、借金返済の解決にはならず、またしても騒動に。領主の館に訴状を投げこむとともに、その夜、役人宅を打ち壊しました。そこで足輕を派遣したものの鎮圧できず、結局領民の要求を飲む形で決着しています。この

騒動は旗本の窮状やそれによる幕藩体制の崩壊を如実に物語っています。

日本昭和音楽村を宣言

長きに亘った高木家の治世も、明治維新とともに終焉し、明治三〇年、この地方は養老郡になりました。そして昭和三〇年には、旧牧田村・一之瀬村・多良村・時村の四ヶ村が合併して上石津村が誕生。昭和三〇年代後半からの急激な経済の高度成長に追従し、昭和四四年町制を施行し今日に至っています。

こうした経済成長に伴い、伊勢街道の改修や多良ハスの乗り入れなど、交通網の近代化も着々と進み、昭和六二年、国道三六五号の上石津トンネルも約七年の歳月を費やして貫通し、一之瀬ハイパスの完成と相まって町の姿も大きく変わりました。また町の施設も、緑の村公園や郷土資料館、江口夜詩記念館などが続々とオープン。日本昭和音楽村の理念のもと、音楽文化の振興を図りながら、確実な発展を遂げていきます。



国道365号上石津トンネル

参考文献

- 『上石津町史』通史編昭和五五年上石津町
- 『上石津道をたずねて』
- 平成十一年上石津町教育委員会
- 『岐阜県地名大事典』角川書店
- 『上石津ふる里断』
- 昭和五八年上石津町教育委員会
- 『町勢要覧2000』平成二十二年上石津町
- 『上石津土地改良史』昭和六二年上石津町

上石津町の用水事業と 未来プロジェクト



水鏡湖

約九割が山林の上石津町は、
牧田川の源流の地。

連年にわたる水害は生活を脅かす一方、
眼下に川を見下ろしながらも、
取水には困難を極め、用水の整備は、
村を挙げて取り組んできました。
町のおちろちろに残る溜め池は、
過去の事業を物語る証し。
昭和になってからは広瀬ダムや
一之瀬ダムが整備され、
農業生産に大きく貢献しています。
また、現在では
「上石津グリーンバレー計画」を実施。
自然と共生するまちづくりを
着々と進めています。

室の下地先の間歩(坑道) 牧田川左岸村地先で取水し、文條地区へ送る水路



上石津の郷土・桑原家住宅



しかしせつかく間歩
を開削したものの、落
盤などにより廃坑とな
りました。そこで江戸
後期には、上石津の郷
土・桑原高行の指図に
より、一之瀬のドドメ
キ谷・上谷川の峡谷を
なす所の岩盤に水路
をつくるのが計画さ
れました。この岩盤は
硅質の固い岩石でき
ており、ここに長い蛇
の這うような細い水路
を、ノミとカナツチで
掘り取りながら、時に
は短いトンネルを整備
する作業は極めて困難でなかなか進みません
でした。

水と闘った近世の農民

近世の社会は石高制のもと、米作・米納が
原則とされていたので、農業生産に密着した水
の問題は深刻で、たんに自然災害としての水
害による治水工事だけではなく、新田開発に
伴う用水事業が非常に増えた時代でした。つ
まり、近世の農民は水と闘いながら新しく耕
地を切り開き、そこへ用水を引いて水田を開
墾していったのです。上石津町でも山崩れや川
欠・砂入りなど、連年に亘る水害に難渋する
一方、用水問題にも直面。眼下に牧田川を見
下ろしながらも取水することはできず、溜め

ドドメキ谷の用水路

池の築造と並行し、時には肌や岩山に間歩坑
道(を掘り、用水路を開削してきました。
一之瀬の上谷川・上石津中学校の南の谷の
溪谷の岩壁には、へばりつくように300mにも
及ぶ用水路が残されています。この用水は、現
在の上石津中学校付近の水田へと導かれてい
ました。
そもそもこの辺りは谷川が底深く流れてお
り、水利の便が悪かったため畑地がほとんど
で、水田にするために間歩を掘ってきました。



ドドメキ谷の岩盤上に作られた水路

このように用水路ができて水が取り入れら
れると、畑は次々と水田に替わり新田開発も
伴って、明治に入ると水田は約三町歩余り。用
水不足を補うために、溜め池も築造されまし
た。しかし現在は、そのほとんどが中学校地
として姿を消しています。

広瀬ダムと牧田川用水

上石津町には昔から、牧田川の水を田に取り
入れるために、田植え前になると大勢の
人々が川に出て、大きな石を積んだり、石を

広瀬ダムと牧田川用水



詰めた蛇籠を並べたりして川を堰き止め、水を田に引き入れました。これらの堰の数は、牧田地区と一之瀬地区では合わせて二箇所もありました。しかしひとたび豪雨になると牧田川は増水し、堰は流されて、再度堰を造らなければなりませんでした。

そこで村人たちは県に陳情を重ね、昭和六年には取水堰兼用の広瀬ダムの建設が始まりました。これは長さ約二百m、高さ一・八mという大規模なダムで、川の水を完全に堰き止めるため、基礎部分は底深くの岩盤まで達する大工事でした。昭和九年にはようやく完成しています。

広瀬ダムの完成により、水は左岸の用水取水口から集水池を経て、分水樋門で各用水路に分けられました。牧田川左岸用水路は、乙坂・山田の各用水路へ、石畑・沢田・桜井の各用水路は牧田川の川底をサイホン式のヒューム管で川の右岸へ導水されました。

この工事により、水の苦勞もなくなり、水の論争もなくなりました。

一之瀬ダムの建設と用水路の統合

戦後の復興期、一之瀬地区を襲った水害は深刻で、牧田川に設けた井堰は完全に流失してしまいました。そこで当時の村長をはじめ村民は、この災害を契機にダムの建設と統合用水路を造り、再災害の発生を防止したいと協議を重ね尽力の結果、昭和一六年、県営事業として砂防堰堤を計画、着工されました。これは牧田川水系でも最大規模のもので、水圧を避けるため、三つの放水口が設けられ、右岸よりには魚道と用水取水口が整備されました。このダムが一之瀬ダムです。

用水は取水口から制水壁で約二〇mの水路は導かれ、余水吐水路と水量調節水門が設けられています。ここから二〇m余の水路トンネルを造って沈砂池に導き、右岸筋約三〇ha、左岸筋約七・五haの灌漑に配水されます。また、左岸筋へな牧田川の川底にヒューム管を埋設しサイホン式に送られています。

一之瀬ダム



一之瀬ダムはその後、伊勢湾台風をはじめとした洪水により被害を受けましたが現在も変わりなく活動しています。

参考文献

- 『上石津町史』通史編昭和五四年上石津町
- 『上石津の土地改良史』昭和六二年上石津町
- 『上石津むかし』
- 平成二二年上石津町教育委員会
- 『上石津道をたずねて』
- 昭和五七年上石津町教育委員会
- 『ふるさと養老』

養老郡教育振興会学校教育部会

上石津グリーンバレー計画

一九九三年に策定された上石津グリーンバレー計画は、二〇〇二年を目標とし、一〇のシンボル事業が進められてきました。ではその実績を紹介しましょう。



一、牧田川などの自然環境の保護
護岸に自然石を配し、美しい景観と魚の生息地を守っています。同様に自然に配慮した親水エリアを整備。安全な水場として人々に親しまれています。

二、町民一体化交通システムの整備
福祉バスには前方に乗降口を設置。安全性を高めました。また、順次環境に配慮した公用車を導入していきます。

三、新産業の導入と在来産業の刷新
王ヤシなどのカット野菜の需要を見込み、優良企業を誘致。また、休耕田を貸し農園にして、町外の人にも収穫を楽しんでもらいます。野菜を販売するショップも設け、生きがい農業を進めています。

四、住機能、住環境の整備
東山田団地は、期一六戸、期四〇戸を分譲。町営住宅も整備しています。また、各集落間の移動が便利になるよう、集落道西廻り線の整備を進めています。



五、福祉ネットワークの形成
平成二二年にアイサリースセンターが完成。高齢者福祉の拠点として、よりきめ細やかなサービスを提供しています。

六、日本昭和音楽村の整備
音楽によるまちづくりの拠点として、水領湖畔に整備。上石津町出身の作曲家、江口夜詩の資料展示コーナーや音楽ホールを備え、音楽文化振興の拠点となっています。

七、生涯学習ネットワークの構築
上石津大学や公民館講座を充実させ、学習機会を多彩に提供しています。また、学習を通じた交流を促進するため、各講座の合同発表会をおこなっています。

八、まちの玄関を兼ねた「健康ふれあいパーク」の建設
「健康ふれあいパーク」として、総合体育会館、テニスコート、グラウンドを整備。各種スポーツ大会や練習などに利用されています。平成二二年のインターハイでは、女子ハンドボールの試合会場となりました。

九、滞在・宿泊機能の整備
日本昭和音楽村に自然体験研修施設として「アトジ」を建設。山小屋風の広々とした空間で、音楽合宿や団体の研修、家族やグループの親睦に利用されています。



一〇、地域間交流と国際交流の促進
中学校のAET(英語指導助手)は、平成二二年度から町専任に。また西濃の一市五郡でケント州との青少年交流事業や鹿兒島県吹上町との交換ホームステイなどを行っています。

上石津

自然を愛し、夢を語り合う人々

HUMAN WATCHING



時小学校のマリーゴールド



安川直樹さんのマンドリン

美しい自然が息づく上石津は、夢のキャンパス。澄みきった清流が人々の心を潤しているように、緑豊かな山並みは、大きな夢を育ててくれるのでしょ。そんな上石津の夢を集めました。

自慢の花づくりで 岐阜県知事賞を受賞

マリーゴールドやパンジー、サルビアなど、季節の花々が咲き競う時小学校の花壇は、グリーンタイム活動の成果です。一年を通じて、全校児童が一緒になり、花づくりに取り組んでいます。作業の中心は四年生から六年生の児童で構成された栽培委員会。委員長の川添さんは、毎日、水やりをしますが、これがむずかしい。やり過ぎると根ぐされをおこしますからね」と、照れ笑いしながら語ってくれました。



時小学校には大小八つの花壇と学年花壇があります。メイン花壇のデザインは、三年生から六年生のなかで募集して決定します。そして種まきが始まり、自分たちで栽培した花の苗を、デザインを基に植えていきます。こうした作業は、学年の垣根を取り払った縦割りのグループ、なかよし班が担当。花づくりのなかで、上級生と下級生の会話が生まれ、自然と

時小学校栽培委員会のみなさんと 委員長の川添祐司さん

れあつむずかしさや素晴らしいさを体感しています。こうした活動は高く評価され、県と中日新聞共催の「Broccoli・Pumpkin・Cucurbit」では岐阜県知事賞を受賞。また、この手づくりの花を独居老人にプレゼントしよう、年二回、「春の使者」と「秋の使者」を行います。「上石津の自然が大好き。だつて山へ入れば木の実がたくさんあるし。お金がなくても遊べるよ」



時小学校のみなさんは、自然の申し子。冷たい風もなんのその、元気いっぱい花づくりに取り組んでいます。

音楽で広がる笑顔の輪



アンサンブルウェルテはイタリア語で「緑の合奏団」という意味です。美しい自然に恵まれた上石津ならではのネーミングです。平成八年

アンサンブルは生まれました。「メンバーは七名です。音大出のピアノの先生もいますが、アマチュアでも楽しめる会にしよう」と、リーダーを選択。木管楽器の音色が素敵ですよ。むずかしい楽譜が読めない人でも何とかなるだろうとね。

「パートリ」はもちろん、憧れのハワイ航路。上石津町出身の作曲家、江口夜詩が生んだ往年の名曲です。他にも、アメイジング・グレイスや、ちやらのアマンなど、親しみやすい曲ばかり。お年寄りから子どもまで、みんなが楽しめる。そんな手づくりコンサートをめざして、月に一度、練習を重ねています。

「この町には、全席S席といつ素敵な音楽館があります。水鏡湖のほとりにある、日本昭和音楽村。ここに江口夜詩記念館という小さなコンサートホールがあるんです。この素晴らしいホールを利用して、

アンサンブルウェルテ代表 日比ひとみさん

みんなが音楽の感動を分かち合いたい。そんなところから、まちに実る秋の音色コンサートが生まれました。アンサンブルウェルテはもろろん、オペラや少年少女合唱団など、音楽好きのみんながステージに立ち、たくさん拍手をいただきました。音楽活動を中心に広がる笑顔の輪。街角のクリエーションも、みなさんが心待ちにしているイベントの一つです。そして今、密かに日比さんたちが企画しているのが、各集落の公民館への出張コンサート。

「お年寄りが出かけにくいのなら、こちらから押しかけてしまおうとね。上石津の素晴らしいのはみんなの心が届くこと。私たちが企画したこともいずればカタチになり、実を結んでいく。みんなの顔が見えてしまつてくらの小さな町だから、できるんです。よね。人の優しさや温かさが感じられるこの町を、ますます音楽いっしょにしていきたいですね」



やわらかな色を紡ぎだす草木染め

緑の村公園のなかにある、シルクの里工房は草木染めを体験できる施設です。工房の前面ではマリーゴールドや藍、サルビアなど、染料となる草木が栽培されています。



「九年前から草木染めを始めましたが、奥が深いものです。ね。日々の天気にもよって、同じ素材でも全然違う色に染め上がってしまう。今、私がしているカラシ

シルクの里工房 三宅しずるさん

色の入カーフは杉が材料。これも少し寒くなつたなあと思つて染めてみると、茶色になつて。それは洗くるといい色合いなんです。が、寒暖の差でほとんど色が変化していく。同じ色はなかなか表現できないんです。一つの素材を把握するには、一年の歳月がかかります」

シルクの里工房草木染め教室の開始と同時に担当するようになった三宅さんは、以来、染色に全力投球。京都へ出てきて草木染めの基本を学ぶ一方、上石津の山々を歩いて採取した草木を、毎日のように染め続けたそうです。そんな三宅

上野の八朔祭

9月1日



牧田上野地区の八朔祭は、三代將軍徳川家光の時代から今日まで続けられている、伝統的な祭礼行事です。この祭りでは、大神宮をまつり常夜灯を中心に、笛や太鼓による祈願が行われます。また、沿道に飾られるカボチャ灯籠といわれる丸型も大燈籠も祭りを華やかに盛りあげます。この灯籠にちなみ、通称カボチャ祭とも呼ばれています。

上石津町 EVENT INFORMATION

緑の村風あげ大会	1月中旬
牧田川アマゴ釣り解禁	2月上旬
一之瀬まつり	4月4日
東平茶園桜まつり	4月上旬
もんでこ朝市	4月～12月第1日曜日
緑の村公園春まつり	4月上旬
ばたんまつり(千珠ばたん園)	5月上旬
マウンテンタイムフェスティバル	6月中旬
牧田川アマゴ釣り解禁	6月下旬
緑の村公園夏まつり「もんでこかみいしづ」	7月最終土曜日
町内各地盆踊り大会	8月14日・15日
上野の八朔祭	9月1日
時山まつり	9月15日
緑の村杯争奪テニス大会)	9月中旬
曳山桃源閣	10月1日
牧田まつり	10月4日
多良まつり	10月10日
時まつり	10月10日
元禄獅子舞(不定期年)	10月中旬
緑の村公園秋まつり	11月上旬
各神社大かがり火	12月31日



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方
 名古屋 名神高速道路(約30分) 関ヶ原IC R365(約30分) 上石津町

岐阜方面からお車をご利用の方
 岐阜 R365(約50分) 上石津町

お問い合わせ

上石津町役所
 〒503-1300 岐阜県養老郡上石津町大字上原1380
 TEL0584-45-3111 http://www.ginet.or.jp/kamiishizu/

気ままにJOURNEY

雨につれた紫陽花が人々の目を楽しませる六月初旬、時山ハコケ村では、アコースティックの野外音楽祭「マウンテンタイム」が開催されます。このイベントは、二七年前から中部地区の愛好家たちにより毎年開催され、一六年前から、時山で開催されるようになりまし



た。このイベントの主役はブルグラス、バンジョー、マンドリン、ギター、ベースなどの弦楽器で演奏する、アメリカで最も土の香りのする音楽です。もともと、イギリス移民たちがアメリカの東南部の Appalachia 山中で伝えてきた民族音楽を母体とし、黒人音楽のブルースなどの影響も受け、一九四〇年代から始まりました。

このブルグラスを愛してやまないのが、会の代表でありマンドリン製作者の安川直樹さんです。彼がブルグラスに出合ったのは、慶応大学在学中。折しも学生運動の風が吹き荒れるなか、バンドを結成して音楽向けの学生時代を過ごし、卒業後はアメリカへ。あちこちを演奏旅行していた時、楽器製作者のシークリトル氏に出合います。これが楽器製作へのプロ

「釣りが好きなんです。だから、工房は川の真ん前に据えた。アマゴやイナがいます。しかも、交通アクセスがいい。名古屋はわずか一時間。マウンテンタイムフェスティバルには全国から愛好家が集ってきますよ。」

一台のマンドリンの製作期間は約一か月。数十回にも及ぶ工程の一つも手を抜くことなく、丹精込めて仕上げていく。この妥協許さない姿勢が、全国に「NAO」ブランドのマンドリンマンが広がっているゆえなのでしょう。

「僕自身も演奏しますから、やはり音には厳しくなります。それが「Z」の満足につながっているのかもしれませんが。将来的には、楽器作りを教えることができるような教室を開きたいですね。現在、日本の伝統楽器と呼ばれるものも元来は大陸経由で入ってきました。マンドリンも何百年か経って伝統楽器と呼ばれるかもしれない。また、そつであってほしい。そのためにぜひ、マウンテンタイムに参加していただけて、ブルグラスの楽しさを実感していただきたいですね。」

素顔の自然が息づく上石津でマンドリンを作り続ける安川さん。そんな上石津では今、音楽文化の普及を核に、新しいウェーブが巻き起

ブルグラスを新しい日本の音楽文化に



「新春なら桜、樹

NAO工房 安川直樹さん

皮を染め出すと厚のかなりシクに染まります。地のシルクも地元の養蚕業者の蚕を糸にして織り上げて仕上げたものを使います。本当にもつすべてが手づくり。自然が与えてくれた色はどれもやわらかく、やすらぎのある色です。ぜひ、皆さんも参加してくださいね。」

上石津の空気がビーンと張りつめる冬は、染色のベストシーズン。柔らかな雪を踏みしめながら草木を摘み、その素材を染め上げられるのも、草木の醍醐味だといえますよ。」



木曾三川下流域における 渡船と物流

近世において飛躍的に発達した渡船は、物資や人を運ぶ重要な手段。全国各地に渡船場が設けられ、流通の大動脈を担っていました。これは近代化が進む明治時代に入っても同じこと。しかし、昭和になり架橋が続々と実施されると、華やかな歴史に幕を下ろすことになりました。

渡船の役割

渡船による河川交通が飛躍的に発達したのは近世のこと。架橋技術が未熟であったこともその一因ですが、最も大きな原因は徳川幕府の政策にありま

◆明治初期における木曾三川流域の渡船場(表1) (単位:箇所数)

木曾川水系		長良川水系		揖斐川水系	
川名	渡船場	川名	渡船場	川名	渡船場
飛騨川	11	郡上川	21	根尾川	4
馬瀬川	2	板取川	2	藪川	5
益田川	6	津保川	6	杭瀬川	1
木曾川	37	武儀川	2	相川	2
加茂川	1	今川	2	牧田川	3
迫間川	1	但川	1	津屋川	2
木曾分流	3	長良川	19	揖斐川	27
佐屋川	1	長良古川	1	大樽川	4
		境川	1	中村川	1

(明治14年統計書:岐阜県、明治16年8月より)

宿の七里の渡」を結ぶ海上交通路です。その海路が七里二七.五kmであったことからその名が生まれたといわれています。

この海上ルートの利用はすでに鎌倉・室町時代から行われており、東海道の旅人にとっては欠かせない海上の道でした。

《熱田湊の機能》
宮の宿は東海道四一番目の宿駅で東海道随一の宿場を誇っていました。ここから東海道として渡船が始まったのは元和(一六一六)のこと。湊は熱田奉行が船奉行を兼ねて管理し、その配下に船番所がありました。船番所は慶安四年(一六四一)由井正雪の残党が熱田から京方面に遁走したのを翌年、出入りの船舶・旅人・貨物の検索のために設置されたものでした。藩主の名代・代参、幕府の上使、未印所持者、一系城・大阪城の勤番衆らのほかは夜間の出船を許さず、出入りの船舶を検索して不審な旅人や荷物を目を光らせました。船番所の隣に置かれていたのが船会所です。ここは旅人の荷物の船継ぎを取り扱った所、船

年寄以下の船会所役人が詰めており、普通の宿場の問屋場に当たる機能を果たしていました。

《桑名湊の機能》

海上七里を渡れば伊勢国桑名宿。当時の船着場には長さ七〇間、高さ二間の石垣が張りめぐらされており、湊には渡船七五艘が控えていました。また、湊は遠浅であったため、干潮時には渡船が船着場まで入れませんでした。そこで、旅人や荷物を沖合いの保田まで運ぶ小渡船も四二艘用意されていました。船賃は表二の通りですが、乗合の場合を示しています。桑名湊で渡船に従事する船頭、水主の総数は三六〇人と定められ、藩はその生活を維持するために船方新田一〇町歩を開き、無年貢無役の土地として彼らの控地としました。

ところで東海道上りは熱田乗船・桑名下船下りは桑名乗船・熱田下船が普通でしたが、四日市で乗下船する旅人も少なくありませんでした。これが桑名・四日市両宿の間で大争論になる原因に、せちかく桑名集めた人足・伝馬・船が無駄になるといつ理由からでした。寛保二年(一七四二)桑名の宿役人が道中奉行に訴えました。なかなか決着がつかず、やると宝暦二年(一七六二)に至って、原則として直渡海を禁ず」との達しが出され、紛争は解決しました。

現在「七里の渡公園」には常夜灯と時の鐘が残されており、往時の面影を伝えています。

《陸路と渡船を結ぶ佐屋ルート》

この文章からも何とぞができるように、男性はもちろん、女性も大変困った船旅だったの

した。この解決策として、両人は小用をたすための竹筒しびんのようなものをもって乗船しています。

七里の渡

《熱田と桑名を結ぶ海上ルート》

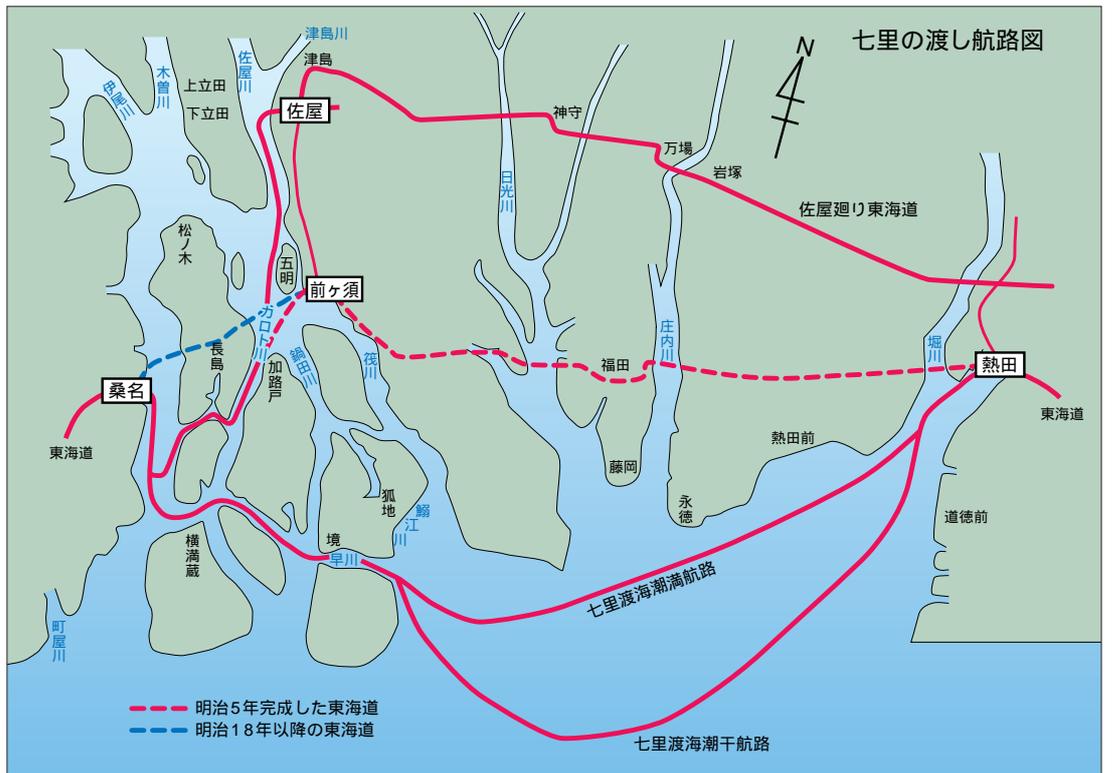
徳川家康が江戸開府後、まず手がけたのが街道政策でした。慶長六年(一六〇一)江戸と京の間に東海道五三次の宿駅制度が設けられました。これに伴い整備されたのが七里の渡。これは、東海道のつち宮の宿、宮の渡から桑名

◆熱田宿(表2)

次宿までの船賃		正徳元年 (1711)	弘化元年 (1846)
種別	1 駄附共	109文	162文
	1 正口	113文	168文
	1 人	45文	68文

「東海道中膝栗毛」は次のように記しています。
「宮の宿の旅籠での会話」
亭主「明日は、佐屋廻りにされますか」
北八「すべしから舟にしよう」
「弥次舟はいが、あいらあはどつも。舟では小便するのがこわくてね。七里のるといっもんだから、どつしたもんだらう」
この解決策として、両人は小用をたすための竹筒しびんのようなものをもって乗船しています。

この文章からも何とぞができるように、男性はもちろん、女性も大変困った船旅だったの



天保8年「尾張・伊勢新田図」(写:名古屋市鶴舞中央図書館蔵)により作成(図1)

で、この佐屋路を利用した著名人には、松尾芭蕉もいました。芭蕉はその時の様子を「真蹟懷紙」の中で、「おそしき影なほ生やした飛脚のよつな勇が同船し、折々舟人をわめいかるに興さめて、山々のけしきつしなつ心地し

知ることができません。佐屋宿は佐屋街道で最も大きな宿場であり、本陣二軒、脇本陣一軒、脇本陣格一軒を擁し、旅館屋も三軒を数えました。また、三里の渡りトのための船役も四一人あり、役船一七艘を所持して渡河に従事しました。これ不足の時は津島など二三箇村から寄船を務

侍る。」と書いています。この影の飛脚らしい男が威張っている様子は、当時の旅の一端を物語った文です。公定の船賃で渡れるのは公用の旅人や武士であって、他の旅人は一三倍の料金だったようです。そのほかに船頭たちは船霊への祝儀銭や酒手をねだるのが習わしになっていました。どつやらの飛脚は公用でもあつた。他の乗客にもそのような不正はさせないぞと、睨みつけていたようです。これらの文献から、往時の船旅がいかに大変であったかをつかがい

めさせていました。この他、藩主の御座船三艘を預かり、幕府も万治年中(一六五八〜一六六二)より平田船十艘を預けていました。また、熱田湊と同様、承応元年(一六五二)より湊番所が設けられ、夜間の出船は禁止されました。しかし、江戸後期頃から佐屋リトに大きな変化が生じてきました。つまり、水路である佐屋川が土砂の堆積のため天上川に、このため佐屋湊の渡船に支障が生じ、佐屋川の水運が衰退化に向かったのです。

そして明治二年(一八六九)、木曾川船番所が廃止されたのに続き、明治五年(一八七二)佐屋路は廃止され、開設以来一八〇年間の宿場、問屋、湊の佐屋駅はその歴史を閉じました。佐屋街道が廃止されたのと同時に設置されたのが、福田・前ヶ須の両駅です。その新リトは、東は愛知郡宝田村(現名古屋市中区)から海西郡弥富村大字前ヶ須新田(現愛知県弥富町)まで、前ヶ須は木曾三川を渡る渡船の基地となり、前ヶ須湊から桑名は一里の航路でした。この渡船が開始したのは明治初頭、渡船の就航により、宮七里の渡、佐屋二里の渡はともにも廃止となりました。それに伴い、前ヶ須湊には湊番所が置かれ、宿場業者も集中。明治一八年頃からは有料渡船を設け、木曾川を渡つて長島と結ばれました。開設当初の交通量は一日平均四〇名前後でしたが、徐々に増加し、大正末期には百名を越えるほど了。このようにして、昭和八年に尾張大橋が開通するまで、前ヶ須渡船は、尾張と伊勢を結ぶ重要な役割を担っていました。なお、前ヶ須渡船は、ふたつの渡ともいわれ、筏川の東辺りにその碑が建っています。しかし、往時の面影はもうありません。

江戸時代初頭から隆盛を極めた渡船交通は、明治時代に入つても、陸上交通を円滑にするための橋が十分架橋されなかつたから、大正昭和初期までは活躍していました。木曾三川を分流した明治改修の際、木曾三川流域民が提出した、木曾揖斐両川間開門設立請願書に記載された渡船の利用状況からも、その役割の重要性を知ることができます。しかし、昭和以降急速に進められた架橋により、渡船は衰退することになった。現在、木曾川では、西中野の渡、長良川では、小紅の渡、木曾川と長良川を渡る、森下の渡「日原の渡」が残っていて、船頭さんが常駐している渡場は立田村の葛木渡船があります。

渡船の終焉

前ヶ須渡船

明治改修における開門設立請願書にみる明治26年当時の木曾川から揖斐川に入り桑名に至る船荷重(表3)

一 愛知県下立田より桑名まで(二里半)	米六艘四分	八〇艘四分	雑貨十七艘八分	計十九艘六分
一 愛知県下前ヶ須より桑名まで(二里)	米六艘八分	八十七艘	雑貨七艘四分	計四十四艘分
一 愛知県下津島より桑名まで(三里)	米一艘四分	八三艘二分	雑貨二艘二分	計六艘八分
一 愛知県下佐屋より桑名まで(二里半)	米五艘	八二艘六分	雑貨三艘四分	計十艘
一 愛知県下北方より桑名まで(二里)	米〇艘	八〇艘六分	雑貨〇艘六分	計〇艘六分
一 愛知県下笠松より桑名まで(十里)	米四艘	八二艘	雑貨二艘八分	計八艘八分
一 愛知県下白原より桑名まで(四里)	米一艘二分	八四艘	雑貨〇艘四分	計六艘
一 愛知県下黒瀬より桑名まで(八里)	米〇艘二分	雑貨一艘		計一艘二分
一 愛知県下森津より桑名まで(二里)	米〇艘一分	八二艘六分	雑貨〇艘分	計一艘
一 愛知県下狐地より桑名まで(二里半)	米〇艘	八〇艘	雑貨〇艘六分	計〇艘六分
一 愛知県下加路戸より桑名まで(三三)	米一艘八分	八三艘	雑貨一艘四分	計六艘二分
一 愛知県下前ヶ須より桑名まで(三三)	米〇艘六分	八二艘六分	雑貨一艘分	計四艘四分
一 右の外各所より桑名まで	米〇	八二艘二分	雑貨七艘二分	計九艘

以上船数計百十六艘に分但し船舶八艘凡八十五石積り四十五石積り通常トス最小モノニ至テ八稀しに十五石積りモノアリ

- 参考文献
- 『木曾三川治水百年のあゆみ』平成七年建設省
 - 『木曾三川流域誌』平成四年建設省
 - 『東海道歴史散歩』昭和六三年大衆書房
 - 『佐屋町史』通史編平成八年
 - 『熱田区誌』
 - 『昭和六二年熱田区制五〇周年記念誌編集委員会新編立田村史』平成八年立田村
 - 『弥富町史』平成六年弥富町

TALK & TALK

図-3 尾張藩が濃州三湊へ物資を着けるよ命した自藩領の川湊・及び網境引用文献「木曾三川流域史」P718,図-4, 1, 3, 17による



支配下にあつた。しかし、近代になると、鉄道（中央線）が開通する一方、木曾谷に森林鉄道やいくつものダムが完成し、筏による流材は全く不可能となつた。長良・揖斐両川でも筏流しが一部で行なわれたが、揖斐川では特色ある段木にもつて主に流送された。これは揖斐川の山間部が急流である上、岩場が多く、筏流送が難しかったためであつた。段木とは木材を長さ約七五m、太さ約一五〜四五cmに切り揃え家庭の燃料用に使つたものをよんだ。山間部でこれを川に投入し、揖斐川本流では、現、揖斐川町の上流部左岸の森前の支流根尾川では現、大野町内の六里の、それぞれ土場（湊）で拾い上げ（図1）、その割木（新）に加工し大垣などの消費地に陸送していた。段木の流送では段木の沈み防止のため、ブナ、シデなど水に沈みにくい軽い樹種を藩は段木に指定していた。一方、優良建築用材が木曾谷ほど多くはなかつた長良・揖斐両川の山間部では特に

木曾三川水運の史的推移

木曾川は既述のように近世、全川が尾張藩の支配下におかれ、水運の中では木材流送が最優先されていた。長良川では近世、流域の山間部支配に変化があつたが、近世後半には岐阜に尾張藩の長良川役所が設けられて以降、同藩は流送の物資に「川役銀」を課していた。揖斐川では、その本流および根尾川の山間部の大半を近世初頭以降、大垣藩が領有し、既述の段木という特色ある流送制度を施行していた。更に述べるべきは、

近代以降、木炭生産が大きく発展、木曾三川を下るなどで、名古屋市などに販路を拡大した。また、木曾三川の扇状地の川底に堆積していた大小の丸石は掘り上げて川舟にのせ、民家の石垣や河川の治水工事などに利用されていた。一方、川下から舟で遡上した商品には藁灰や瓶類などがあった。水田の多い下流部の農家の糞から出た灰は仲買人が買集め、川を上るのに灰は軽量であり、上流部の農家の肥料として金肥普及前まで重用された。瓶や土管類は特産地の愛知県常滑などから、海路を経て川を遡上していた。

揖斐川とその支流牧田川との合流点に位置していた船付・栗立・鳥江の三湊についてである。この三湊を領有する尾張藩は、三湊の整頓維持のため、木曾三川に領有する川湊から関ヶ原方面に陸送する荷は全てこの三湊を経由するよう指令していた（図3）。このように近世の水運では沿川領有の藩の規制を強く受けていた。

近代に入ると、木曾三川の水運に大変化が起つた。それは、一部を既述したが、従来の水運に優る陸上輸送手段が出現すると共に、ダムなど水運への障害が出現したからである。例えば、木曾川では今渡ダムの完成、昭和一四（一九三九年）でその上流への遡上が大打撃をつけた（図4）。しかし三川のうち、揖斐川では、大垣湊から下流においては第二次世界大戦前後まで水運が続けられていた。例、明治一五（一八八二年）、大垣・桑名間の夜、二時間定期で一八銭、木曾・長良の二川の三角州部でも若干の船上旅客や物資輸送が残っていた。

陸上の交通・輸送手段が未発達の前時代は河川の水運が流域の上・下流部を結び最も重要な方法であった。しかし、時と共に林産物の荷の内容が大きく変わってきた。その好例が木炭・薪の濃減の減少であり、それが山村の過疎にもつながっている。さらにこの林産物需要の急変にふれると、かつて揖斐川流域を領有した大垣藩は山村の飢饉時の補助食糧として、板の木の実を利用するため、板の木を止め木へ筏採集止として保護していたが、その後それが大木化して、近代以降、民家の高級床材とし

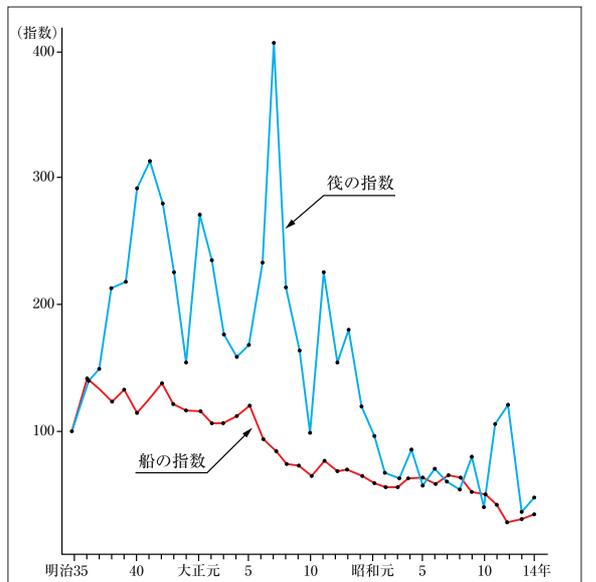


図-4 船頭平門門を通過した舟と筏の数量の変化引用文献「木曾三川流域誌」P659,図-4, 1, 2, 4による

河川機能の変化と新しい機能分担

ところで、川がもつ多機能のうちの重要度に変化がみられる。そのうち、河川水についてみると、流域内の工業化・都市化の進展につれ、川への排水の水質悪化が進み、川の魚類の減少、河川漁業不振を招いてきた。他方、河川のレジャー等への新しい利用が近代以降に進んできた。河川敷の土壌は元来肥沃であり、近代から牧草栽培に利用されてきたが、川と河川敷は共に「フラット」への利用が都市化、レジャー発展と共に展開してきた。木曾川の「日本ライン下り」と鶴岡（犬山）、長良川の鶴岡（関）、岐阜、木曾三川国立公園の新設などがそれである。そして自然環境を重視する時代の到来と共に木曾三川は良質の「水瓶」として重要されてきた。流域は「一つの見方が新しい立場から重視され、治水への配慮と共に重要となってきた。

引用文献
建設省中部地方建設局
『木曾三川流域誌』平成四（一九九二年）

民話の小箱 弥太郎用水

上右津町

西山は、山に囲まれた小さな村です。
むかし村人は、火をかけて山を焼き、そこへ粟や稗、蕎麦などをつくり、谷田では米をつくっていました。しかし、年貢をおさめてしまうと、手元に残る穀物はくわすか。「いつかは白い米を食いたい」人々はささやかな夢を語り合っていました。ある年のことです。

村の世話役をしていた弥太郎は村の衆に、「みな衆や、たと米がとれるように荒地に水を引こうじゃないか。そうすれば日照りや長雨でも困らんぞ」

弥太郎の意見に納得した村人はさっそく水路の工事を開始。谷川から水を引くための頑丈な溝を築きました。今でもこの用水を「弥太郎用水」と呼んでいます。

みんなの努力で水不足はなくなりましたが、せつかく作った田んぼは猪に荒らされてしまいます。またしても弥太郎は、猪を防ぐための猪垣を約四キロ、汗と泥にまみれて作り上げました。

しかし山里のこと。収穫も思うように増えず、猪の害も減ったとはいえなくなりません。そこで弥太郎はみんなの代表となってお役所に行き、「お米がとれなくてみんな困っています。どうか三年間、年貢を取らないでください」と頼み、無年貢にしてもらいました。

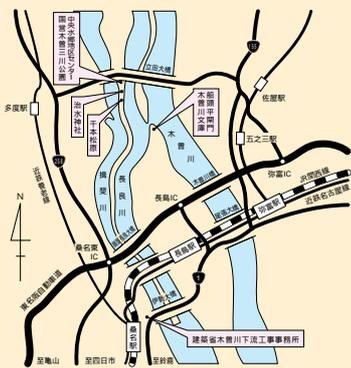
でも魔がさしたというか、弥太郎の気持ちは変わり、村へ戻ると年貢を今まで通り取り立てて、

ぜいたくな暮らしをしていました。

これが後にわかれると、村人たちは弥太郎を村から追放してしまいました。しかし弥太郎が死ぬと、用水を作った努力に感謝してその罪を許し、脇差しを添えて丁寧に裏山に葬ったといわれています。



木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 《入館料》無料
 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島I.Cから車で約30分
 東名阪長島I.Cから車で約10分
 《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・木曽川文庫
 〒496-0947 愛知県海部郡立田村福原
 TEL(0567)24-6233



編集後記

今号の編集にあたって、上右津町の皆さんや資料館館長さんに変なお世話になりました。また河川交通は安藤先生に締めくくっていただきました。

木曾・長良背割堤の16k付近木曾川に今年も11月下旬からコハクチョウが飛来しています。中には幼鳥も見られ、現在、9羽が確認されています。

今年も、編集担当一同頑張ってますので、ご愛読下さい。

今回は江南市を特集します。

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真
 右上：冬の牧田川
 中右：西高木家本陣跡 中左：日本昭和音楽村
 下：水嶺湖